

京都学派の形成の過程で『哲学研究』が果たした役割とその特徴

藤田正勝

京都帝国大学に文科大学が開設されたのは明治39（1906）年のことである。最初哲学科・史学科・文学科が作られ、その全体をまとめる学会として「京都文学会」が作られた。その研究の成果を発表する媒体として、明治43（1910）年に『芸文』という雑誌が発刊された。大正時代に入ってから学科ごとの学会が作られ、哲学科を母体に「京都哲学会」が作られた。その創立の時期に関しては二つの記録がある。大正3年11月の『芸文』の彙報には、この年に京都哲学会が作られたとあるが、京都哲学会の機関誌『哲学研究』の創刊号（大正5年4月）の彙報には、この年の2月に「京都哲学会発会式」が執り行われたとある。

この学会の特徴としては、「広く会員を全国に募る」とともに、哲学や心理学、倫理学、美学など、哲学科の諸講座の枠を超えて活動を行ってきたという点にある。内に向かいがちな目をあえて外に開き、学問の枠を超えて、人間の知の可能性、学問の協働の可能性をめぐって議論を重ねてきた点にその特徴がある。その点で『哲学研究』は大きな役割を果たしたと言える。

『哲学研究』の創刊に深く関わった西洋哲学史講座の朝永三十郎は、『哲学研究』の発足」と題したエッセー（『哲学研究』第400号所収）のなかで創刊の事情について次のように記している。『哲学研究』が創刊されるやうになつた動機——といふ御尋ねですが、それは当時一部に噂されてゐたやうに、「東京の『哲学雑誌』に対抗し

て」京都側の新進の元気を示してやらうといふやうな野心のわざでもなく、こちらの連中のあり余つたエネルギーのはけ口を求めたといふのでもありません。京都の哲学科も創められておほよそ十年になり、教師の顔も一通り揃ひ、卒業生の数も次第に殖えて行くにつれて、其等の卒業生諸君及び教師自身の手習草紙といふ意味のものが欲しくなつた結果に外なりません」。

この「手習草紙」という言葉が、この雑誌の性格をよく示している。しかし、それは水準が低かつたということではない。大正5年(1916年)4月の創刊号の巻頭を飾つたのは西田幾多郎の長編の論文「現代の哲学」であつたし、第2号には田辺元の「普遍に就いて」が発表された。西田が独自の哲学を打ち立てたと言われる論文「場所」も『哲学研究』に発表された。

100年以上にわたる『哲学研究』の歴史をふり返つて、どこにその特徴があるかを考えてみたい。

(1) まず、「手習い草紙」という朝永三十郎の言葉が示すように、『哲学研究』には、まだ荒削りなもの——西田幾多郎が『自覚に於ける直観と反省』で使つてゐる表現で言えば、「悪戦苦闘のドキュメント」であるようなもの——が発表された。しかし、それはのちに大きな思想に発展していったし、まさにそれが作り上げられていくプロセスが若い研究者たちに大きな刺激を与えた。

長く『哲学研究』の編集に携わつた澤瀉久敬は、その第400号の記念号に発表した「編輯の思い出」というエッセーのなかで、次のように述べている。単行本よりも、むしろ『哲学研究』に発表された短論文のなかに「時代を画する研究」が盛り込まれていた。「『哲学研究』は日本の哲学思想誕生の器である」。実際、『哲学研究』は西田幾多郎の『善の研究』以後の思想(『自覚に於ける直観と反省』、『働くものから見るものへ』の「場所」の論理)が作りあげられていった場所であり、田辺元の「種の論理」が形成されていった場所であつた。

それらは最初、必ずしも完成した思想ではなかった。むしろ、現在進行形の哲学であった。そして、いま言ったように「悪戦苦闘のドキュメント」であった。『哲学研究』はそれをそのまま載せる場所になった。しかし、そこから従来にない新しい思想が生みだされていったと言ふことができる。

(2) そういう教師たちの苦闘とも関わるが、彼らと彼らの周りに集まった弟子たちとが作り上げた集団が、いわゆる京都学派であった。その特徴の一つとして Selbstdenken の尊重を挙げることができる。そうした態度がこの『哲学研究』にも反映している。

この Selbstdenken という言葉、つまり「主体的に思索する」という言葉は、西田や田辺の弟子たちによつて使われた言葉であるが、その背後には、西田幾多郎自身が信条としていた態度・考え方があった。西田はたとえば、弟子の木村素衛がフイヒテの『全知識学の基礎』という著作を翻訳したときに、その序文を執筆しているが、そこに次のような文章が出てくる。「私は常に思ふ。我々の心の奥底から出た我国の思想界が構成せられるには、徒らに他国の新なる発展の跡を追ふことなく、我々は先づそれ等の思想の源泉となる大なる思想家の思想に沈潜して見なければならぬ。そしてその中から生きて出なければならぬ」。

まず「徒らに他国の新たな発展の跡を追ふことなく」と言われている点がおもしろい。戦後も、そして現在も、外国のもつとも新しい思想を誰よりも先にすばやく紹介する人がすぐれた哲学者だというような雰囲気があるが、そういうった流行の後追ひという現象が、すでに西田幾多郎の時代にもあったことをこの言葉は示している。それに対して、西田はどのように流行を追う態度をはつきりと戒めている。そうではなく、古典に深く沈潜する必要性を強調している。しかしおもしろいのは、そのように古典の大切さを強調するとともに、他方で、そこから「生きて出なければならぬ」というように、そこにとどまるのではなく、そこから出て、生きた思索をすることの大切さを強調している点である。西洋の古典的な哲学に沈潜するだけでなく、同時に、自ら思索することを西

田は弟子たちに求めたのである。そういうところから *Selbstdenken* ということが、西田の弟子たちのあいだで標語のように語られたのだと思う。

弟子たちもそういう主体的な思索に基づく論文を『哲学研究』に発表していった。ただ、戦後になってからのことであるが、そういう思索のスタイルに対して批判が出されたことにも触れておきたい。古代ギリシア哲学の研究者であった田中美知太郎が、西田や田辺らの哲学に対して厳しい批判の言葉を浴びせている。西田らの思索について田中は、たとえば「雑然たる読書の刺激によって生じた感想や思いつきを綴った、いわゆる悪戦苦闘のドキュメント——実は一種の読書ノオトにすぎないもの」(『ロゴスとイデア』「あとがき」)と記している。

哲学と文献学とは、古い時代から互いに批判しあってきたが、そういう対立がもつとも典型的に現れた一つの例であると言えるかもしれない。ここで言われていることは、もちろん哲学と文献学とのあいだの対立という問題に尽きるのではなく、「哲学はどうあるべきか」ということにも深く関わる問題だと言いうこともできる。

(3) 京都学派の大きな特徴の一つは、相互に批判を許しあう関係であったという点にある。『哲学研究』はそういう相互批判の場所になったと言いうことができるであろう。

『哲学研究』の歴史のなかでもっとも重要な意味をもった論文は何かと言えば、おそらく昭和5年(1930)の第170号に発表された田辺元の「西田先生の教を仰ぐ」がそれであったと言えるのではないかと思う。

ここで田辺は自分の前任者であった西田を厳しく批判した。その批判の根本の点は、西田が絶対無の自覚という宗教的体験から出発してそれを哲学の原理として立て、その自己限定として諸々の段階の一般者とそこにおいてある存在とを理解したという点、言い換えれば、西田の哲学がプロチノスの哲学と軌を一にして、発出論に陥るのではないかという点であった。

哲学が絶対的なものを立てることは田辺も認めるのであるが、それは「与えられたもの」としてではなく、あく

まで「求められたもの」として、言いかえれば要請された「理念」として立てるべきではないか、というのが田辺の主張であった。西田はこれに直接反論する論文は書かなかったが、しかしそれ以後、田辺が問題にした「行為」や「歴史」の問題をめぐって思索を深めていった。

この両者の論争は、西田と田辺の共通の弟子であった人たちに大きな驚きを与えた。澤瀉と同じように、『哲学研究』の編集に長く携わった中井正一は、第400号に発表した「回顧十年」というエッセーのなかで、「この田辺博士の師に対する肉薄と対決を、私達は悲壮なる思ひをもつて、見まもり、息をのんだのであった」と記している。田辺は弟子たちの前で西田哲学に対する批判を行った際に、いつもアリストテレスの *Amicus Plato, sed magis amica veritas*（プラトンは慕わし、されど真理はさらに慕わし）という言葉を語ったという。それに対して西田は、務台理作宛の書簡で、「田辺君の論文、誠に真摯な態度にして学界実にかゝる気分の盛ならんことを切望に堪へませぬ」と記している。このような態度が京都学派の哲学の大きな発展につながったのではないかと考えられる。

(4) 『哲学研究』は、このように議論を共有し、相互に批判を行い、それを通して研鑽を行う場所を提供した。その点に『哲学研究』が果たした大きな役割があると言えることができる。そういうところから多くの弟子が育ち、いわゆる京都学派が大きくなっていったわけであるが、そこにあった教師と弟子たちとの関わりを下村寅太郎は「密度の濃さ」という言葉で表現している。

下村は東京文理科大学（のちに東京教育大学となった）で長く教鞭を執った人であるが、『哲学研究』の500号に発表した「回想」というエッセーのなかで、東京と京都の雰囲気と比較して次のように述べている。「京都に生れて、歳四十歳にして初めて故郷を離れた。……東京に移り住んで、京都の師友から切り離されて、大都会の中に孤りを感じたが、同時に解放をも感じた。しかし京都を離れて初めて京都の空気の密度を感じた」。そしてこの

「密度」についてさらに次のように語っている。「京都では」巨峯の谷間にゐるが、此処は平原である……「開いた」気分を感じた。しかし同時に、東京には京都に於けるやうな密度の濃い結びつきが人々の間にないやうに感じられた。何処にも中心がない。学問的密度の希薄さを感じたのはそのためかもしれない。京都では先生たちが厳然たる中心であった。東京にはそのようなものが存在しないやうであった。人々は師について談することは稀れであった。……このことは同時に京都の閉じた気分を追想せしめた」。

京都には「中心」があつたというのは、言うまでもなく、西田幾多郎と田辺元の存在を指してのことである。その強烈な存在の故に「密度の濃い結びつき」が存在したということが言われている。この強烈な中心の存在と、それをめぐる人たちの強い結びつきがあつたために、「京都学派」という言い方がなされるようになったと言ふことができるであろう。しかし他方で、下村が「京都の閉じた気分」とか、「京都の気分の重々しさ」といった表現をしている点も興味深い。下村は西田の弟子として京都大学の中核に位置する人であつたが、同時にその「外」に立つて、京都学派の動向を冷静に——やや冷ややかに——見ていたと言えるかもしれない。しかしいづれにせよ、この下村の言う「密度」を京都学派の特徴の一つに挙げることができる。その「密度」を形成する場となつたのが『哲学研究』であつたと言ふことができるであろう。

（筆者　ふじた・まさかつ　京都大学名誉教授／日本哲学史）